勤務医部会だより

「尾張中部医療圏の激甚自然災害時の初期対応について」

幹事　今村　達雄

阪神大震災により京阪神地区は甚大な被害を受け、やっと復興が成し遂げられたが、１昨年３月には再び東日本大震災が勃発し、津波による被害は想像を絶し、更に原発の被害も加わりいまだに今後の展望もまったく予想もつかず、世界中が不安の中でその成り行きに注目している。日本は地震、台風、豪雨等常に自然災害の襲来に脅かされ、今後もそれを避けることはできない。そのためには日頃から日常的に訓練を行い、災害に遭遇することを忘れず、準備を怠らないようにすることが肝要である。中部地区では、東海、東南海、南海の連動地震も近い将来相当高い確率で到来することが予想され、ますます緊張感がたかまっている。

愛知県には12の医療圏があり、それぞれに34の災害拠点病院が指定されている。

私どもの尾張中部医療圏は西春日井郡２市１町、人口約16万人のきわめていびつな医療圏であり、公的病院、災害拠点病院もない地域であるが、比較的近くに３次救急病院があり、現在その病院との医療連携は大変円滑に行われ、日常診療では特に問題は生じていない。

しかし一旦大災害が発生した時は、道路、通信網、電気ガス等社会基盤が甚大な損傷を受け、他医療圏の病院に頼ることは不可能であり、特に災害発生時には外部との連絡網、道路網も途絶し、独自にその対策を考慮しなければならない。そのためにはどのような準備と心がまえが必要か、医師会、薬剤師会、歯科医師会、保健所、行政、消防組合、地区消防団などと頻回に議論を重ね対応を模索している。先日も師勝保健所が中心となり、２市１町の防災関係者が集まり３次病院でもあり災害拠点病院でもある小牧市民病院にも参加をいただき発災時の当面の対策を検討した。すでに三師会と行政とは災害時の協力協定を締結し、西名古屋医師会の会員は、発災時はまず速やかにあらゆる手段を用いて医師会事務所または地区の災害医療対策本部（各庁舎、または保健センター等）に集合する。薬剤師会は、地域内にある大手卸の配送センターと協力して薬剤の全面的な供給を担う。各自治体はそれぞれ食料、飲料水、その他災害時に必要不可欠なものを備蓄する。当医療圏内には２次救急を行える病院は済衆館病院のみであり、災害センターを通してまたは単独で来院した患者はここでトリアージを行う。この基本線に基づき、地域の中に見合った災害初期対応の防災訓練を行っている。24年12月初旬には第４回目の総合訓練として東南海地震による大規模災害発生を想定し、県、各市町の防災関係者、消防組合、消防団、病院職員約250名が参加し、病院としての災害初期対応につき訓練を行った。訓練のテーマは１）災害発生直後からの院内外の情報収集と把握、災害本部の立ち上げと連絡体制の確立、２）病院前トリアージ部門の運営（トリアージポスト設置および外来傷病者のトリアージ、治療エリアでの応急処置、色別患者集積場所での傷病者管理、トリアージタッグの管理、３）病棟管理と傷病者受け入れ、域外搬送（病棟での患者、スタッフ、設備機材の被災状況の把握と災害対策本部への連絡、入院患者への必要な処置、トリアージで赤、黄となった患者の受け入れ、対応不能傷病者の院内転送、域外搬送）であった。発災後２時間で約80名の傷病者が来院する想定であったが、訓練の積み重ねの効果により予定の半分の時間で対応することができた。今後もさらに訓練を重ね、職員全員が災害に対する危機感を常に持って、地域の中での役割をはたせるように心がけたい。

地震、風水害など自然災害はいつ襲ってくるか予想もつかない。当地区は平成12年秋未曾有の水害が来襲し、新川の決壊により広範囲に町が水没した苦い経験がある。想定以上のことが起きる可能性を常に考え、日ごろの訓練を重ね、まず自分の身の回りを固めておくことが必要と考える。

（済衆館病院）